

# 小学校家庭科における家族とのコミュニケーションに関する 授業実践

八幡(谷口)彩子<sup>\*1</sup>・森田阿沙美<sup>\*2</sup>・恒松真穂子<sup>\*3</sup>

## Practice of Lesson on Family Communication for Home Economics Class in Elementary School

Ayako YAHATA-TANIGUCHI <sup>\*1</sup>, Asami MORITA <sup>\*2</sup> and Mahoko TSUNEMATSU <sup>\*3</sup>

(Received October 1, 2010)

The purposes of this paper is 1) to develop learning materials for promoting better family communication for home economics class in elementary schools, and 2) to examine the effects of the lesson for elementary school pupils in the actual class.

For these purposes, 1) we distributed a questionnaire of scientific recognition for life, living skills and value recognition, before/after the actual lesson on family communication in home economics classes in the Elementary School attached to the Faculty of Education, Kumamoto University, and 2) compared descriptions from pupils between before and after the class.

The results are as follows: 1) we developed the learning material titled, "Let's think about relationships between you and your family," which aimed to learn life skills as living problem solution skills on family communication. 2) Descriptions from pupils on family relationships as the scientific recognition for life, increased after the class more than before the class, for examples, "We should discuss or conduct from a standpoint of other families to build good relationships with our family," and so on. 3) According to descriptions from pupils on living skills of family relationships, many pupils could recognize and describe how to communicate properly with their family. 4) We could not observe the differences between descriptions from pupils on value recognition before and after the class on a statistically significant level.

**Key words :** practice of lesson, family communication, home economics education, elementary school, life skills

### 1. はじめに

よりよい人間関係を築くためにコミュニケーションスキルを身に付けることは現代的教育課題の1つである。従来、家庭科では衣食住生活に関する授業が中心であった。とくに、小学校家庭科では家庭における人間関係である家族関係を扱う授業は少なかった。家庭科に求められる社会的要請の変化を受けて、今後、小学校家庭科においても、家族とのコミュニケーションスキルを高める授業実践が求められている<sup>1)</sup>。

本研究に先立ち、森田は、小・中・高校生の家族とのコミュニケーションの実態を把握するために「小・中・高校生における家族とのコミュニケーションに関する調査」(2007)を行った<sup>2)</sup>。この調査によれば、家族とのコミュニケーションの中心的役割を果たす会話(言語によるコミュニケーション)は、あいさつなどの言葉かけ、学校での出来事を話すなどの情報交換等において、小学生が父親や母親との会話をする頻度が高く、小学校・中学校・高校と学校段階や学年が上がるにつれて、その頻度は低下する。

<sup>\*1</sup> 熊本大学教育学部家政教育学科, 860-8555 熊本市黒髪 2-40-1

Department of Home Economics Education, Faculty of Education, Kumamoto University, Kurokami 2-40-1, Kumamoto, 860-8555, Japan

<sup>\*2</sup> 長洲町立長洲小学校, 869-0123 玉名郡長洲町長洲 1776

Nagasu Elementary School published by Nagasu Town, Nagasu 1776, Nagasu town, 869-0123, Japan

<sup>\*3</sup> 熊本大学教育学部附属小学校, 860-0081 熊本市京町本丁 5-12

Elementary School Attached to Faculty of Education, Kumamoto University, Kyomachi-Honcho 5-12, Kumamoto, 860-0081, Japan

家族と一緒に行動についても、中学・高校生より小学生の方が、家族と一緒に行動する頻度が多かった。

また、家族との意見の調整が必要となるいくつかの生活場面での対応の仕方については、自分の意見を通すよりも、相手と話し合っ決めてという回答が小学生に多く、家族との話し合いへの志向は、中学・高校生より小学生の方が高かった。

これらのことから、小学生の時期は、中学・高校生の時期よりも、家族とのコミュニケーションをとりやすい時期であるといえる。家族とのコミュニケーションが低下する前の小学校5・6年生の時期に、自分と家族との関係のあり方について考える機会を設けることは発達段階と時機にふさわしい題材であると考ええる。

そこで、本稿では、小学校5・6年生の発達段階を考慮した家庭科における家族とのよりよいコミュニケーションを促進するための題材を開発し、実地授業を通してその導入の可能性について検討する。

本授業実践の目的は、①小学校5・6年生の発達段階に応じた、家庭科における家族とのよりよいコミュニケーションを促進するための題材を開発すること、②実地授業を通して、①で開発した題材を小学校家庭科で行うことの効果について検討すること、の2点である。

2. 研究方法

(1) 題材開発の観点

本授業実践では、家庭科における家族とのよりよいコミュニケーションを促進するための題材を開発するにあたって、中間の提唱する「生活技能・生活の科学的認識（事実認識）・生活の価値認識」による生活問題解決スキルとしてのライフスキル<sup>3)</sup>の習得を目指す。すでに、八幡・恒松は、中間が提唱する「生活問題解決スキルとしてのライフスキル」という観点に立った授業分析研究を進めているところである<sup>4)</sup>。中間の生活問題解決スキルとしてのライフスキルの観点に立てば、人間関係スキルとしてのコミュニケーションスキルには、単に言葉かけの方法などの「生活技能」の習得だけではなく、「生活の科学的認識（事実認識）」「生活の価値認識」と一体となったコミュニケーションスキルの習得が不可欠である。本授業実践でめざした家族とのコミュニケーションスキル育成の達成内容は以下の通りである。

- ①生活技能：よりよい家族関係を築くために適切な言動ができる。
- ②生活の科学的認識（事実認識）：よりよい家族関係を築くために、自分がどのような言動をすればよい

表 1. 小学校および中学校学習指導要領（2008）における  
家族とのコミュニケーションに関する学習内容

	1・2年	3・4年	5・6年	中学1・2・3年
家庭科			内容A（1）ア 自分の成長を自覚することを通して、家庭生活と家族の大切さに気付くこと。 内容A（2）ア 家庭には自分や家族の生活を支える仕事があることが分かり、分担する仕事でできること。 内容A（2）イ 生活時間の有効な使い方を工夫し、家族に協力すること。	内容A（1）ア 自分の成長と家族や家庭生活とのかかわりについて考えること。 内容A（2）ア 家庭や家族の基本的な機能と、家庭生活と地域とのかかわりについて理解すること。 イ これからの自分と家族とのかかわりに関心をもち、家族関係をよりよくする方法を考えること。
生活科	内容（2）家庭生活を支えている家族のことや自分でできることなどについて考え、自分の役割を積極的に果たすことができる。 内容（9）自分の成長を振り返り、多くの人々の支えにより自分が大きくなったこと、自分でできるようになったこと、役割が増えたことなどが分かり、これまでの生活や成長を支えてくれた人々に感謝の気持ちをもつとともに、これからの成長への願いをもって、意欲的に生活することができるようにする。			
道徳	内容2（4）日ごろ世話になっている人々に感謝する。 内容4（2）父母、祖父母を敬愛し、進んで家の手伝いなどをして、家族の役に立つ喜びを知る。	内容2（4）生活を支えている人々や高齢者に、尊敬と感謝の気持ちをもって接する。 内容4（3）父母、祖父母を敬愛し、家族みんなで協力し合って楽しい家庭をつくる。	内容2（5）日々の生活が人々の支え合いや助け合いで成り立っていることに感謝し、それにこたえる。 内容4（5）父母、祖父母を敬愛し、家族の幸せを求めて、進んで役に立つことをする。	内容2（6）多くの人々の善意や支えにより、日々の生活や現在の自分があることに感謝し、それにこたえる。 内容4（4）自己が所属する様々な集団の意義についての理解を深め、役割と責任を自覚し集団生活の向上に努める。 内容4（6）父母や、祖父母に敬愛の念を深め、家族の一員としての自覚をもって充実した家庭生活を築く。

かわかる。

③生活の価値認識：家族（と良好なコミュニケーションを行うこと）のよさに気づく。

この3つの習得をめざした題材を開発する。

つぎに、小学校学習指導要領<sup>5)</sup>、中学校学習指導要領<sup>6)</sup>では、各教科等において、家族とのコミュニケーションに関する学習がどのように系統づけられて記述されているかを検討した。その結果、表1に示すように、義務教育段階では、道徳、家庭科、生活科において、家族とのコミュニケーション（家庭生活を中心とする人間生活における人と環境との相互作用（関係性））に関連する記述がみられた。これらをもとに、家庭科という教科の独自性を考慮しつつ、他教科等との系統性を踏まえた題材を開発する。

## (2) 開発した題材における効果検証の方法

開発した題材は、実地授業を通してその有効性について検討するとともに、実地授業を受けた児童にどのような効果がみられるのかについて、実地授業の前と後に授業アンケートを行い、以下の手順で分析する。

①授業アンケートは、本研究で目指す生活問題解決スキルの「生活の科学的認識（事実認識）」「生活の価値認識」「生活技能」に関する内容で構成する。実地授業前のアンケートでは、子どもたちの実態について把握するために「生活の科学的認識（事実認識）」と「生活の価値認識」について尋ねた。実地授業後のアンケートでは、実地授業前のアンケートの内容に「生活技能」に関する質問を加えた。

②「生活の科学的認識（事実認識）」「生活の価値認識」については、実地授業の前と後のアンケートで同じ内容で回答してもらい、両者を比較検討することによって、実地授業の効果を検討する。

③本研究では、「生活技能」の習得状況を把握する方法として、授業アンケートへの記載内容の分析、という方法を用いた。コミュニケーションスキルが求められる具体的な場面を設定し、それに対してどのように対応するのか、その対応をとる理由について記述することにより、児童が「生活の科学的認識（事実認識）」「生活の価値認識」をもとに、適切な受け答えを行っているのかについて分析する。

## (3) 授業アンケートの内容

授業アンケートの内容は次の通りである。

①生活の科学的認識（事実認識）について

「家族が気持ちよく過ごすことが出来るためのポイントは何だと思いますか？また、家族が気持ちよく過ごすためにあなたにできることは何ですか？」という自由記述の方式でアンケート記載を求めた。（授業前

後同一）

②生活の価値認識について

生活の価値認識を把握するために、授業の前と後のアンケートでは、「家族はあたたかい感じがする」「家庭の中では家族が自由に意見を言える」「家族に何でも相談できる」「家族と励まし合うことができる」「家族に悪いことをした時謝ることができる」「家族にありがとうと言うことができる」「家族のいいところをほめることができる」の7項目について、「とてもそう思う」「まあまあそう思う」「あまりそう思わない」「まったくそう思わない」の4つの中から1つを選択してもらった。（授業前後同一）

③生活技能について

実地授業後のアンケートでは、生活技能に関して、以下の問題を設定した。

弟がすでに本を読み終わり、私はまだ読んでいる途中に、「お兄ちゃん、もう読み終わったんだけど、かえてくれない？」と頼まれたときの私の言動と、そのような対応をした理由とをあわせて答えてもらった。

## 3. 結果と考察

### (1) 開発した題材について

今回実地授業を行った題材「自分と家族の関係を考えよう」の学習指導案について資料1に示している。本題材は、本来、中学校技術・家庭（家庭分野）「内容A(2)イ これからの自分と家族とのかかわりに関心をもち、関係をよりよくする方法を考えること。」で扱われている内容である。本題材の実施に先立ち、筆者らが行った「小・中・高校生における家族とのコミュニケーションに関する調査」からもわかるように、小学生や高校生と比較して、中学生の段階では、家族とのコミュニケーションが図られにくくなる。家族とコミュニケーションが図られにくくなる前段階の小学校5・6年生の時期に、自分と家族との関係のあり方について考える機会を設けることは重要ではないかと考える。そこで、中学校技術・家庭（家庭分野）「内容A(2)イ」で扱われている題材を小学校家庭科で扱うことは可能であるか検討したい。

本題材の目標は、①よりよい家族関係を築くために適切な関わり方ができる（生活の技能）②どのようにしたら、よりよい家族関係を築くことができるかわかる（知識・理解）の2点である。本題材は、筆者らがめざしている生活問題解決スキルとしてのライフスキルを育てることをめざしたものである。

### (2) 実地授業について

実地授業は、2008年11月26日（水）第6限目（45

4 単元の指導計画

第5学年3組 家庭科学学習指導案  
平成20年11月26日(水)第6校時 場所 家庭科室  
指導者 熊本大学教育学研究科 森田 阿沙美

1 題材 「自分と家族の関係を考えよう」

2 題材について

(1) 題材観

現在、情報化社会や女性の社会進出、少子化や遊び環境の変化など、子どもたちを取り巻く環境は大きく変化している。このような中で、人間関係の希薄化が進み、子どもたちのコミュニケーション能力の低下が指摘され始めてきた。家庭生活においても、家族の在宅時間のばらつきや、居住様式の近代化、個人利用のテレビ、携帯電話などの普及により個別化が進行し、家族とのコミュニケーションの減少が懸念されているところである。

自分と家族との関係を考えるという題材は中学校で扱われている。2007年10月に小学校4年生から高校1年生までを調査対象とし1713人に調査を行なった。その調査では、家族に対して中学生の時期より小学生の時期が肯定的に捉えていた。また、家庭での実践も行いやすい時期であることがわかった。中学生ではなく、小学生の高学年の時期に家族との関係を考える題材を扱う意義があるのではないかと考えるこの題材を設定した。

(2) 児童観

本クラスは活発でさまざまな角度から意見を述べることができるクラスである。前時に行ったアンケートでは、「家族が気持ちよく過ごすことが出来るためのポイントは何だと思いますか?また、家族が気持ちよく過ごすためにあなたにできることは何ですか?」という質問に関して、「掃除」「整理整頓」と答えた児童が35名と大変多かった。現在学習している内容をうけての結果だと思われる。「相手の立場に立った言動をする」といった内容を出している児童は4名だった。「家族に関する価値認識について全体の傾向を見ると、「家族にありがとうと言うことができる」が授業の前で、「1とてもそう思う」と答えて割合が75.0%と高く、「家族はあたたたかい感じがする」が「とてもそう思う」と答えた割合が61.1%だった。授業の前と後で共に「とてもそう思う」と答えた割合が低かったのは、「家族に何でも相談できる」で授業の前が30.6%であった。

(3) 指導観

日ごろ、自分の言動がどれだけ影響を与えているか気づいていない児童が多いのではないかと考え、相手の立場に立つことができるよう、ロールプレイを行う。  
また、シナリオを考え出し合うことで、家族が気持ちよく過ごすためには何が大切なのか考えを深めることができるようにしたい。

3 題材の目標

- よりよい家族関係を築くために適切な関わり方ができる。(生活の技能)
- どのようなしたら、よりよい家族関係を築くことができる。(知識・理解)

時	学習内容	観点
1 (本時)	○どのようにしたら、よりよい家族関係を築くことができるかわかる。	知識・理解
2	○よりよい家族関係をきづくために適切な関わり方ができる。	生活の技能

5 本時の学習

(1) 本時の目標

○よりよい家族関係を築くために、自分がどのような言動をすればよいかわかる。(知識・理解)

展開	学習内容	形態	指導内容◇ 支援内容	評価	備考
導入 5分	1. 本時の学習の課題を知る  2. ロールプレイをする	一斉	○ どのような場面でのような登場人物か把握させる。 ◇ 手伝いを願うする場面の絵を提示し、イメージしやすいようにする ○ ロールプレイについて知らせる。 ◇ 教師がロールプレイをしてみて、意欲やイメージをつかみやすいようにする。		絵・ワークシート、ロールプレイの行い方のお面
5分	3. 家族の気持ちをかんがえる	班	◇ ロールプレイの目的と方法を提示する。 ◇ 読み合わせではなく、役になりきることが重要なことを強調する。 ○ 自分の班でロールプレイをやってみる。まずは個人で練習をして班でやってみる家族の気持ちや家族の雰囲気についてかんがえる。		
展開 15分		個班	○ シナリオの続きを考えさせる。 ◇ まずは、個人で考えたあとに班で出し合うようにする。		ボード
15分	4. どのような言葉や態度が家族みんなが気持ちよく過ごすことができるか考える。	一斉	○ 考えたシナリオを発表する。 ◇ 班で考えたシナリオを黒板に貼って示す。 ○ 本場に家族が気持ちよく過ごすことができる言葉かけか考える。 ○ どのような言葉や態度が家族みんなが気持ちよく過ごすことができるか考えさせる。 ◇ わかったと素直に伝える事がよいのか、自分ができることはなるべくやると努力するのが良いのか。自分の状態を伝えて断る方がいいのか葛藤できるよるうにあげかける。 ◇ 相手の立場に立った言動の大切に気付かせたい。	どのようにしたら、よりよい家族関係を築くことができるかわかる。	
5分	5. アンケートに答える	個	○ アンケートにこたえる		アンケート

表2. 授業アンケート「家族が気持ちよく過ごすためにできること」の記述内容

[illegible]

分)に、熊本大学教育学部附属小学校第5学年3組(40名)で行った。授業者は森田阿沙美である。

以下、実地授業の前と後に行った授業アンケートの分析結果を述べる。

(3)「よりよい家族関係を築くために、自分がどのような言動をすればよいかわかる」(生活に関する科学的認識)に関する概念の変化について

「よりよい家族関係を築くために、自分がどのような言動をすればよいかわかる。」という生活の科学的認識(事実認識)が実地授業の前と後でどのように変化するかを調べるため、「家族が気持ちよく過ごすことが出来るためのポイントは何だと思いますか?また、家族が気持ちよく過ごすためにあなたにできることは何ですか?」という質問に、実地授業の前と後に回答してもらった。表2に授業前と後の記述内容をまとめた。

まず、授業前の記述内容については、家族関係に関する記述が41、ついで、住生活に関する記述が36、食生活に関する記述が12、衣生活に関する記述が2、「えがおでいること」などのその他を含めると総計101の記述があった。住生活に関する記述が多かった理由として、実地授業を行ったクラスで、実地授業前に、住生活に関する学習を行っていたためと考えられる。家族関係に関する記述の中では、「手伝い」に関する記述が14と最も多く、「会話をする」という記述が5、「相手の意見を聞く」という記述が4、「プライバシーが守られている」という記述が2であった。

本題材の目標の「よりよい家族関係を築くために家族の立場に立って言動をする」という点に関して、授業前の記述としては、「お互いの気持ちをわかること」「譲りあったり、思いやりを持った行動をすること」などの「家族の立場にたった」記述が6見られた。

一方、実地授業後のアンケートでは、「家族が気持ちよく過ごすことが出来るためのポイントは何だと思いますか?」という質問に対して、家族関係に関する記述は86、ついで住生活に関する記述12であった。「することをきちっとやる」などのその他の記述18を含めると、総計116の記述があった。

実地授業の前と後で、家族関係に関する具体的な記述内容の変化をみると、まず、家族関係に関する記述が86と増えた。とくに、「挨拶」に関する記述は、授業実践前では1であったが、授業後では13に増えていた。その他の記述では、「笑顔」という記述数が、授業実践前と後で2から6と増えていた。これは、今回の授業実践ではロールプレイを行い、自分の言葉や表情でどのような気持ちになるのか考える学習活動を行ったためではないかと考える。

また、「相手の意見を聞く」などの記述は、実地授業前は4であったが、実地授業後は13に増えた。そして、「相手がどう思うか考えてしゃべる」「相手の気持ちを考えて言葉を言ったり行動する」など、「家族の立場にたって言動をする」という記述については、授業実践前の6から16に増えた。

今回の実地授業では、「母・父・私が忙しい休日、手伝いを頼まれたとき」の場面を設定し、「家族が気持ちよく過ごすために、私の言動を工夫する」授業を行った。子どもたちの意見として、「家族に不快を与えない断り方を考える」「忙しくても家族のために手伝う」「断るときも、家族の頼みを聞く時も、大切なことは家族の立場にたった言動をすることだ」などの意見が出た。これらの意見をもとに、「お父さん・お母さんも忙しい。私も忙しいときに、どうしたらみんなが気持ちよく過ごせるだろう?」と発問をしたところ「お母さんたちが何時に帰るか聞いて、手伝いをする計画を立てる」など、生活時間の見直しにつながる発言もみられた。さまざまな子どもたちの意見を授業の中で出し合うことができたが、授業者が求める「家族の立場にたって言動をする」という認識にもう一步踏み込むためには、児童からさまざまな意見を聞いた後のまとめ方を工夫する必要があったと感じている。

(4)「よりよい家族関係を築くために適切な関わり方ができる」(生活の技能)について

授業後のアンケートでは、「家族関係を築くために適切な関わり方ができる」ための生活の技能に関する概念形成の状況を検討するために、弟が本をすでに読み終わり、私はまだ読んでいる途中に、「お兄ちゃん、もう読み終わったんだけど、かえてくれない?」と頼まれたときの私の言動と、そのような対応をした理由をあわせて記述してもらった。記述内容は表3の通りである。

まず、全体を見ると、「断る」27、「いいよ」とすぐにかす」9であった。さらに、「断る」という断り方を詳しくみると、「ごめんけど、読み終わってからでいい?何かしておいて。」など自分がまだ読んでいるから、読み終わった後に貸すことを伝えるなど、工夫した断り方とみられる記述が、「断る」27のうち25でみられた。このことは、本実地授業で、「家族の立場に立って言動をする」ということが意識づけられた結果と考える。そのような言動をとった理由としては、「相手の気持ちを考え、強い口調で言わない」など家族の立場に立って言動を考えたとする記述が15みられた。

(5)「家族のよさに気づく」(生活の価値認識)の変化

表 3. 生活場面における言動とその理由の記述内容

分類 項目	生活場面における言動に関する記述内容	その理由に関する記述
す ぐ に か す	いいよ	この間お兄ちゃんがそうしてくれてうれしかったから
	いいよ	自分のために弟がいやなおもいをするのはいやでから
	しょうがないからかす	弟がかわいそうだから
す ぐ に か す	いいよ。またあとで読ませてね	弟が退屈しそうだし、また読めばいいことだから
	OK	後でまた読めばいいことだから
	うんいいよ。	かわいそうだし、また後で読めばいいから
す	うん。いいよ	かわいそうだから
	いいよ	弟に嫌な思いをさせたくないし、弟が読み終わってからまた読めるから
	いいけど、まだ読んでいる途中だから、そこにしおりをはさんでおいてね。	相手はもう読み終わって、することがないわけだから、ゆずる
断 る (後 で か す)	ちょっと待って、まだ読み終わってないんだ	自分が読み終わっていないから
	あつ。ごめん。今読んでいるから、先にこの本読んだら？	自分も読みたいから他の本をすすめて終わったらかす。
	まだよんでいるから、おわってからでいい？	弟はかえてほしいけど、わたしは読んでいるから合わせた意見
断 る (後 で か す)	少し待って	もう少しよみたい
	ごめんけど、読み終わってからでいい？何かしておいて。	家族には悪いけど、続きを見たくてしょうがないから
	まってもうすぐ読み終わるから	自分も読みたいから
断 る (後 で か す)	読み終わったらいいよ	自分はまだ読み終わってないし、かえたら続きが読めなくなるから
	よんでからね	まだ読み終えてしまっていないから
	読んだ後にしてくれる？いまおもしろいところだから	かしたら本の内容が分からなくなってしまうからわざとおもしろいところを言う
断 る (後 で か す)	あと少しでよみ終わるからもう少しまって	まだ読み終えてしまっていないから自分も本を読んでいるから
	あつ。もう少し待っててくれる？ごめんね。	ごめんねと謝ると弟もわかってくれると思う
	わかった。じゃあきりのいいところですかね。	自分の本なので、またいつでも読めるから
断 る (後 で か す)	この本はまだ読み終わってないから、他の本をかしてあげるね。	かさないのはかわいそうだけど、この本は読み終わってないから
	ちょっとまって、私まだ読み終わってないから。	相手の気持ちを考える。強い口調で言わない
	もう少しで読み終わるからまだ待ってて	弟も読みたがっているし、自分も弟のをよみたいから
断 る (後 で か す)	うん。わかった！でもまだ読み終わってないから読み終わったらかすね	まだ読んでる途中なのにかしてしまったら、最後の内容がわからないから。
	ちょっとまってて、もうちょっとでおわるから。終わったらかえてあげるね。	自分が読むのも学習の1つとして大切だと思うから、終わったらかえてあげるから。
	うん。わかった！でもまだ読み終わってないから読み終わったらかすね。わかった。	ずっと待っててもらうわけにはいかないから。
断 る (後 で か す)	ちょっとまってて。あと少しで読み終わるから	ちょっと待ってただけだったら、早くしてよとかいいはじめて、読めなくなってしまうと思ったから
	もう少しで読み終わるから、少しだけ違う本を読んでて	読み終わるまでに待っててもらうのはかわいそうだから
	ちょっと待っててくれる？ちょっと待っててくれたらうれしいいなあ。	自分もまだ読み終えてないからやさしい言い方で、少し待っててもらう
断 る (後 で か す)	ごめん。まだ読み終わってないからほんだなからとってきて。	強く言うと相手が傷つくから
	いいよ。でもちょっと待ってね。今本読んでいるから	読んでいる途中で終わると話の流れが分からなくなるから
	あお 10 分待ってくれない？しおり外さないでね	きりのいいところまでよめ、しおりを外さなければいいことだから
断 る (後 で か す)	ごめん！あと少しだけ待っててくれない？早く読むから	家族のことも大切だけど自分のことも大切だから少し弟に待っててもらって、自分も少し努力する
	おまえばかか？おれ、今読んでるだろ。	何回も言ってくるから
	やったね～	よんでる途中だから

表4. 家族に対する評価（授業前・授業後）

評価項目		とてもそう思う	まあまあそう思う	あまりそう思わない	全くそう思わない
家族はあたたかい感じがする	授業前(人数)	22	10	4	0
	(割合)	61.1%	27.8%	11.1%	0%
	授業後(人数)	22	11	3	0
	(割合)	61.1%	30.6%	8.3%	0%
家庭の中では家族が自由に意見を言える	授業前(人数)	19	12	4	1
	(割合)	52.8%	33.3%	11.1%	2.8%
	授業後(人数)	16	14	4	2
	(割合)	44.4%	38.9%	11.1%	5.6%
家族に何でも相談できる	授業前(人数)	11	15	7	2
	(割合)	30.6%	41.7%	19.4%	5.6%
	授業後(人数)	12	17	5	2
	(割合)	33.3%	47.2%	13.9%	5.6%
家族と励まし合うことができる	授業前(人数)	15	13	6	2
	(割合)	41.7%	36.1%	16.7%	5.6%
	授業後(人数)	14	16	5	1
	(割合)	38.9%	44.4%	13.9%	2.8%
家族に悪いことをしたとき謝ることができる	授業前(人数)	13	19	3	1
	(割合)	36.1%	52.8%	8.3%	2.8%
	授業後(人数)	20	12	3	1
	(割合)	55.6%	33.3%	8.3%	2.8%
家族にありがとうと言うことができる	授業前(人数)	27	7	1	1
	(割合)	75.0%	19.4%	2.8%	2.8%
	授業後(人数)	26	8	1	1
	(割合)	72.2%	22.2%	2.8%	2.8%
家族のいいところをほめることができる	授業前(人数)	10	18	5	3
	(割合)	27.8%	50.0%	13.9%	8.3%
	授業後(人数)	15	16	3	1
	(割合)	42.0%	44.0%	8.0%	3.0%

について

実地授業の前と後で、「家族のよさに気づく」という家族に関する価値認識がどのように変化したのか、家族に関する価値認識を示した7項目を設定し、実地授業の前と後でアンケートの記載内容を比較検討した。その結果は表4の通りである。

実地授業前のアンケートでは、家族に関する価値認識7項目のうち、「とてもそう思う」と答えた割合が最も高かったのは、「家族にありがとうと言うことができる」75.0%、ついで「家族はあたたかい感じがする」61.1%だった。

一方、「とてもそう思う」と答えた割合が低かったのは、「家族に何でも相談できる」で30.6%、「家族に悪いことをした時謝ることができる」36.1%だった。

実地授業後のアンケートでは、家族に関する価値認識7項目のうち、「とてもそう思う」と答えた割合が最も高かったのは、実地授業前と同様に、「家族にありがとうと言うことができる」72.2%、ついで「家族はあたたかい感じがする」61.1%であった。

一方、「とてもそう思う」と答えた割合が低かったのは、「家族に何でも相談できる」33.3%、「家族と励まし合うことができる」38.9%であった。

これらの家族に関する価値認識（7項目）の記述結果を実地授業の前と後で比較したが、両者間に統計的な有意差はみられなかった。

#### (6) 実地授業をふり返って

実地授業をふり返ると、「よりよい家族関係を築くために、自分がどのような言動をすればよいかわかる」（生活に関する科学的認識）に関する概念の変化に関連して、児童からいろいろな意見が出たあとのまとめ方を工夫する必要があると考えた。

また、実地授業を行った時間はわずか1時間で、家族に関する価値認識について考えを深めるには十分な時間ではなかった。児童から意見が出された後、もう一步踏み込み、家族の生活や思いを振り返る活動を取り入れることで、「家族のよさに気づく」という家族に関する価値認識に変化を与えたのではないかと考え



る。

#### 4. まとめ

本研究では、家族とのよりよいコミュニケーションを促進するために、生活技能、生活の科学的認識（事実認識）、生活の価値認識の3つの観点から、生活問題解決スキルとしてのライフスキルの習得を目指す題材「自分と家族の関係を考えよう」を開発した。本題材の実地授業を行った結果は次の通りである。

①「よりよい家族関係を築くために、自分がどのような言動をすればよいかわかる」という生活に関する科学的認識については、実地授業の前より「家族関係」に関する記述が増え、「よりよい家族関係を築くために家族の立場に立って言動をする」という記述も授業後に増加した。

②「よりよい家族関係を築くために適切な関わり方ができる」という生活の技能に関する理解については、授業アンケートで設定した生活場面において、「よりよい」家族関係を築くために家族の立場に立って言動をする」ことを意識した記述がみられた。

③「家族のよさに気づく」という生活の価値認識に関する質問（7項目）を授業前と後で比較したところ、両者間に有意差はみられなかった。

以上のことから、1時間の実地授業ではあったが、「よりよい家族関係を築くために、家族の立場に立って言動をする」という生活に関する科学的認識を高め、「家族関係を築くために適切な関わり方ができる」という生活技能に関わるライフスキルの理解については、ある程度高められたと考える。

今後の課題として、①小学校家庭科において、家族と良好なコミュニケーションを行うためのライフスキルを高めるための題材の開発を引き続き行うとともに、②中学校・高校の家庭科においても、生徒の発達段階や実態を踏まえた家族とのコミュニケーションに関する題材の検討を行っていきたいと考える。

本題材において習得をめざした家族とのよりよいコ

ミュニケーションを実現するためのライフスキルが、実際の家族との生活場面の中で生かされることを期待したい。

さいごに、本研究に協力いただきました熊本大学教育学部附属小学校第5学年3組（平成20年当時）の児童の皆さんに感謝申し上げます。

#### 注

- 1) 本研究と同様の小学校家庭科におけるコミュニケーションスキルの育成を目指した授業実践として、次の報告がある。  
鳥井葉子・宮本美姫（2005）家庭内におけるコミュニケーション能力の育成をめざした小学校家庭科の授業実践。鳴門教育大学学校教育研究紀要, 20, 129-138
- 2) 森田阿沙美（2009）家庭科におけるコミュニケーションスキル育成に関する研究。熊本大学大学院教育学研究科平成20年度修士論文, 21-144  
なお、本調査に先立ち、同様の目的にて行われた調査報告として、おもなものを挙げると以下の通り。（発表順）  
大町淑子（1979～1983）家族内の団らんを中心とした家族の同一生活行動の考察（第1報～第4報）。千葉大学教育学部研究紀要, 28, 241-267; 29, 153-185; 30, 233-242; 32, 121-153  
新垣都代子・花城梨枝子（1988）子どもの生活と親子の対応。日本家庭科教育学会, 31, 23-38  
中間美砂子・桑原敏子（1993）親子間のコミュニケーションと親和関係。日本家庭科教育学会誌, 36, 1-24  
上野顕子・鈴木敏子（1994）中学生の親子のコミュニケーションの実態と背景。横浜国立大学教育紀要, 34, 95-106
- 3) 中間美砂子（2002）生活問題解決とライフスキル, 43（内藤道子・中間美砂子・金子佳代子・高木直・田中勝（2002）生活を創るライフスキル：生活経営論。東京：建帛社）
- 4) 八幡（谷口）彩子・恒松真穂子（2009）家庭科における概念の形成。熊本大学教育実践研究, 26, 25-32
- 5) 文部科学省（2008）小学校学習指導要領。東京：東京書籍
- 6) 文部科学省（2008）中学校学習指導要領。東京：東京書籍